

ISSN 2434-9690

# 東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会  
2020年1月

# 目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
[特別寄稿]	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
[対照研究]	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
[日本語研究]	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
[中国語研究]	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”—	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

# 類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性

## Analysis of the Definiteness of Japanese Object Nouns —from the Perspective of Typology

魯 美玲  
LU Meiling

**提要** 日语名词不仅有别于英语、罗曼语族各语言，缺乏明显的表示有定无定的形态标记，还不同于以SOV为基本语序的阿尔泰语系的各语言。其名词的有定无定特征犹如雾里看花，始终让人捉摸不透。但如果细究日语的指示词前置现象以及日语口语中（恐怕不仅局限于口语）经常被省略的宾格标记“を”的背后原因，我们不难发现日语与SOV为基本语序的其他语言之间有相通之处可寻。分析阿尔泰语系各语言的宾语有定无定标记可以为日语相关领域的研究提供全新的视角，对诸多日语语言现象提供有力的佐证。本文从语言类型学的角度出发，分析日语及其亲属语言的宾语名词的有定无定标记手段，以期发现更多的语言实事。

**キーワード**：定性 目的語 対格表記 有標

### 目次

1. はじめに
2. 先行研究と問題点
3. 日本語と親族関係にあると思われる諸言語の目的語の定性
4. 日本語の目的語の定性
5. 定性を表す手段の類型論における位置づけ
6. まとめ
7. 問題点と今後の展望

### 1. はじめに

言語学において定性（定・不定）というと、たいていの方が真っ先に思い浮かべられるのは英語の定冠詞（the）・不定冠詞（a/an）であろう。しかし、R. J. Di Pietroに指摘があるように限定詞は言語によって特定の存在するものであるが、物事を限定する能力は普遍的であるに違いない（小池訳1974：123）。すなわち、英語やロマンス諸語においては定性の文法範疇が文の表面上に顕在しており、認識されやすいのに対して、日本語、朝鮮語及びアルタイ諸語においては定性を表す形式が表面上に顕在していないからといって、その言語に

定性の文法範疇が存在しないということは決してないということになる。このような観点を受け、本文では今まであまり問題にされてこなかった日本語の名詞、主に目的語名詞の定性について類型論的アプローチから考察を行なっていきたい。論の進め方として、まず、先行研究の問題点を学習者の立場から指摘し、本文の言語類型論の観点から日本語の目的語の定性を表す手段を検討し、さらなる言語事実への解明を試みるという意図を明記する。そして、日本語と親族関係にあると思われるアルタイ語系に属するモンゴル語およびそのほかの言語の目的語の定性について述べ、これらの言語の目的語の定性を表す文法手段を観察する。また、それを手掛かりに日本語の目的語の定性を紐解くことに努める。最後に、さらに広い視野において、日本語の定性を表す手段の言語類型論的位置づけを考えたい。

## 2. 先行研究と問題点

日本語の定性を論じるにあたって主題を表す係助詞「は」は避けて通れない一環である。日本語学界では従来「は」と主格「が」との関わりについての議論、あるいは「は」の主題性についての検討は盛んに行われてきた（三上 1963, 1969；寺村：1982, 1984；野田 1996；堀川 2012；坂野 2014 など）。しかし、これに比べて、「は」と対格助詞「を」との関係性についての研究、あるいは定性の観点から「は」と「を」とをとりえようとする試みはあまり見られない。それから、日本語の指示語が前に来る現象と対格助詞「を」が省略される現象においては、認知言語学の観点からのアプローチが数多く見られる（筒井 1984；丸山 1996；藤原 1992；野田 2000 など）ものの、これらの研究もやはり認知言語学と語用論的枠組で日本語を内部から分析することにとどまっている。本研究は言語類型論的アプローチから日本語の目的語の定性について、これまでに見過ごされていたところ、あるいは、解釈の難しかった言語現象への分析を試みたい。

## 3. 日本語と親族関係にあると思われる諸言語の目的語の定性

この節では、日本語と親族関係にあると思われるアルタイ語系に属するモンゴル語<sup>1)</sup>およびそのほかの言語の目的語の定性について述べたい。これらの言語の目的語の定性を表す文法手段を観察することが、後節 4 で取り扱う日本語の目的語の定性を紐解く大きな切り口になると思う。

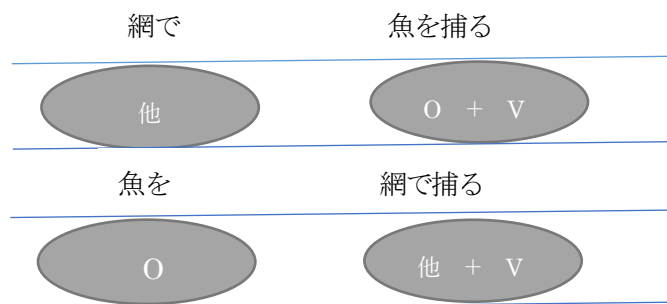
### 3.1 モンゴル語の目的語の定性

モンゴル語はアルタイ語族に属し、SOV を基本語順とし、膠着語としての特徴がかなり発達している。モンゴル語にも「を」に対応する「 $\text{ᠦ}$  (gi)・ $\text{ᠢ}$  (i)」という対格の表記があるものの、以下の二つの条件に分けて、その対格の表記である助詞が現れたり、現れなかつ

<sup>1)</sup> 内モンゴルで話されているモンゴル語。



図 I 「目的語+動詞」と「目的語+他+動詞」の定性の違い



下の文のほうは上の文のより目的語 (O) の存在が強調され、焦点化されており、その「定」の意味合いが強くなっている。これは識別度の高い成分ほど文の前の方に来る「識別度領前原理 (identifiability hierarchy)」からも裏付けられる。このように、目的語と述語動詞の間にほかの成分が挟まれ、目的語の文での位置がより前に来る場合は対格助詞「 $\text{ᠶ}$  (gi)・ $\text{ᠢ}$  (i)」が義務的につけられることは、実は一の「目的語が不定の名詞の場合に対格助詞が必ず省略され、定の名詞の場合は義務的に現れる」とは性質上、同じようなことになる。要するに、モンゴル語で対格助詞「 $\text{ᠶ}$  (gi)・ $\text{ᠢ}$  (i)」が文中に現れるかどうかは目的語の「定性の度合い」によって決まるということになる。

さらに、モンゴル語の目的語名詞には「自分の」に当たる意味合いの格表記 ( $\text{ᠠᠶ}$ ・ $\text{ᠠᠶ}$ ) が存在することはかなり特徴的であり、他の言語にあまり見られない。格の後にこういった再帰助詞をつける場合は、対格助詞が省かれる。

ix	$\text{ᠶ}$	$\text{ᠠᠶ}$	$\text{ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ}$ ..	x	$\text{ᠶ}$	$\text{ᠠᠶ}$	$\text{ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ}$ ..
	お茶	助詞 (自分の)	飲んだ		本	助詞 (自分の)	読んだ
		(自分の)	お茶を飲んだ。			(自分の)	本を読んだ。
	$\text{ᠶ}$		$\text{ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ}$ ..		$\text{ᠶ}$		$\text{ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ}$ ..
	お茶		飲んだ		本		読んだ
			(お茶を飲んだ。)				(本を飲んだ。)

ix、x の目的語  $\text{ᠶ}$  (お茶) と  $\text{ᠶ}$  (本) が格表記 ( $\text{ᠠᠶ}$ ・ $\text{ᠠᠶ}$ ) で表記され、「自分の」という意味合いが追加されることで、不定名詞から定名詞に変わっている。これもやはり、前に検討した「不定の目的語が形態論的に無標で、定の目的語が形態論的に有標である」とこと一貫しているわけである。

### 3.2 そのほかの言語の目的語の定性

では、SOV を基本語順とし、日本語と親族関係にあると思われるほかの言語の目的語の定性の有標性がどうなっているか、その中からいくつかについて検討したいと思う。R. J. Di Pietro には次のような指摘がある。

定冠詞がない言語では名詞の限定化はいろいろな方法で行われる。例えば、トルコ語では、目的語が限定された (definitized) 名詞には格表記が具現化される必要がある。(小池訳 1974 : 125)。

同じような指摘がコムリー (2009)<sup>3)</sup>、L. J. Whaley (1997)<sup>4)</sup>らにも見られる。

xi. Kassa borsa-w-in wässädä-w

カッサ 財布 - その - 目的格 奪った - それ

「カッサがその財布を奪った」

xii. Kassa borsa wässädä

カッサ 財布 奪った

「カッサが (不特定の) 財布を奪った」

アブハズ語<sup>5)</sup>の一致の体系は、xiとxiiで表されているように、直接目的語の定性に影響を受ける、もし定であれば、一致の語尾辞が使われる (xi)。それ以外の場合、接尾辞が現れない (xii)。これと似たようなはたらきはいくつかの言語の格表記においても観察される。ちなみに、ヒンディー語では、直接目的語が人間であるときは、定か不定かに関わらずほとんど必ず K0 という後置詞で標示される。人間が指示対象なのに K0 なしで現れることは非常に稀なのだが、それは指示対象が不定である場合に限られる。定である非人間名詞句も、典型的には K0 をとる。これに対して、不定の非人間名詞句は K0 を絶対に取らない。ヘブライ語 (セム : イスラエル) でも、定目的語のみが接語 et- の表記を受けるのである。<sup>6)</sup>

続いて、ウイグル語にも表層構造上、名詞の定性を表す限定詞 (「冠詞」相当のもの) という文法カテゴリーが存在しないが、定性を表す手段がいくつかあって、その中でより一般的なのは目的語の対格語尾変化の表記の有無の問題であるようである (Aykiz Kadir 2015 : 610)。さらに、カザフ語、ウズベキ語、トルコ語も同じ手段で名詞の定性を表すとの指摘が同氏の研究に見られる。馬 (2015 : 125) によると、サラ語も主に目的語に対格を表す後置詞がつくと定名詞であることを表し、対格を表す後置詞が省略された場合に不定名詞であることを表すとのことである。

この節で検討してきた内容を要約すると、モンゴル語、トルコ語、ウイグル語、カザフ語、ウズベキ語、サラ語など SOV を基本語順とし、日本語と親族関係にあると思われる諸言語にはもっぱら名詞全般の定性を表す統語論的、かつ形態論的に体系化された文法カテ

<sup>3)</sup> 沈家煊、羅天華訳 (2010 : 154) による。

<sup>4)</sup> 大堀壽夫、古賀裕章、山泉実訳 (2006 : 167) による。

<sup>5)</sup> 北西カフカース、トルコあたりで使われる言語。

<sup>6)</sup> 大堀他訳 2006 : 167-181 による。本源は L. J. Whaley 1997。

ゴリーが存在しないというものの、目的語名詞の定性を表す一定の手段が存在する。しかも、その手段はこれらの言語においてかなりの類似性を見せている。これを言語類型論でいう含意的普遍性と見ていいのではないだろうか。しかしその前に、4において日本語の目的語の定性の表し方を考察し、これらの言語との間に見られる相違点とそこに潜められている共通点を見出し、その背景にある原因を探ってみたい。

#### 4. 日本語の目的語の定性

福田嘉一郎 (2016 : 167 - 184) は日本語の名詞には数、定／不定などの文法範疇を成す形態的あるいは統語的な特徴が見られず、名詞の指示特性は文脈に委ねられている場合が多いと指摘し、日本語の主題に現れうる名詞の指示特性を観察し、さらに、そこに認められる制約が名詞述語文の解釈とどのような関係にあるかについての考察を行われている。本研究の目的は言語類型論的な観点から日本語の目的語名詞の定性を捉えることにあるため、名詞、特に目的語名詞の指示特性<sup>7)</sup>はどういった文脈に委ねられているかを検討し、さらに、その言語類型論的観点から見た世界の言語の定性のパターンにおける位置づけを考察したい。

##### 4.1 指示語が前に来る現象

野田 (2000 : 24 - 25) には以下の例を挙げながら、文脈指示の「それ」や「その」、現場指示の「これ」や「その～」は、文の前のほうに置かれやすい傾向が認められることを指摘している。

- (1) 後藤が片思いの詩に明るいメロディーをつけた。
- (2) 飯田が片思いの詩を書いた。それに後藤が明るいメロディーをつけた。
- (3) 石田さんにプログラムを渡してください。
- (4) これを石田さんに渡してください。

例 (1) の「片思いの詩」を (2) のように文脈指示の「それ」にすると、「それ」が文頭に出やすくなる。これについて氏は「文脈指示の「それ」や「その～」は、それより前に出てきた語句を指示するのが普通である。そのため、文脈指示語は、その指示対象に近い、文の前のほうに置かれる傾向がある。」と述べている。(3) のプログラムを「これ」にした (4) では、「これを」が文頭に出やすい現象については「これは文の前に置かれるのはこれらを聞き手に早く示したほうが、聞き手の認知的な負担が少ないからだろう」と指摘している。こういふように、野田氏は文脈指示の例 (1)、(2) と現場指示の例 (3) と (4) に対して、認知的な方面からケースバイケースの解釈を与えている。

しかし、前の文脈指示の「それ」や「その」も、現場指示の「これ」や「その～」も言

---

<sup>7)</sup> 本文でいう「定性」に当たる。



語類型論における「識別度領前原理 (identifiability hierarchy)」で説明すると簡単に理解されうる。実はこれは、3 で見たアルタイ諸語の「定の目的語が形態論的に有標である」と性質上、同じことを示している。日本においては対格助詞「を」は常に目的語に後続しなければならないから、語順を変える手段でその定の目的語の有標性を表しているわけである。

## 4.2 対格助詞「を」が省略される現象

3 では日本語と親族関係にある言語の目的語の定性を考察し、それらの言語は「不定の目的語が形態論的に無標で、定の目的語が形態論的に有標である」という結論に達しているが、日本語では目的語の定性に関係なく常に「を」で目的語の格を表記しなければならない。例えば「彼はケーキを食べた。」ではこの「ケーキ」は話し手と聞き手がともに知っている特定のケーキでもよければ、両者ともに知らない不特定のケーキでもいい。こうなると、一見、目的語の定性において日本語とそれらの言語とは全く次元の違う体系になるのではないかと思うかもしれないが。実は、話し言葉（おそらく書き言葉にも）格助詞「を」の省略（随意的）あるいは脱落（義務的）が非常に目立ち、しばしば問題にされてきたあの現象とは密接な関係があるように思われる。その省略と脱落の背後にはさまざまな動因が考えられるが<sup>8)</sup>、ここで定性の観点から注目したい点だけ述べたい。

丸山 (1996 : 75) は「そもそも、古語においては格助詞「が」「を」が現れないのが一般的である。そのことを引き継いで、現代語の書き言葉にも、無形の現象は多く存在する」と述べている。世界の言語を見ると、「主格」と「対格」が形態的に表記される言語はそんなに多くないことは言語類型論でしばしば問題にされてきた。格表示が無形式している格成分は、動詞から強く要求される格成分である (丸山 1996 : 75)。それがゆえに、格関係を明示しなくてもわかるわけである。そういった意味で、数多くの言語において「主格」と「対格」が形態的に表記されない言語事実に頷ける。日本語の話し言葉（実は書き言葉にも見られる）での対格助詞の省略<sup>9)</sup>現象も実は 3 で見たアルタイ諸語の「定の目的語が形態論的に有標である」と類似性を見せている。

盛 (2000) では語用論的な観点から現代日本語の助詞が省略される現象についての論考が行われている。氏によると「XØY → XはY → XがY」では左から右への順に X の強調される度合いが次第に増していき、一方、Y の強調される度合いが弱まる。さらに、「Ø の機能は X を無色化あるいは非焦点化することにある」との指摘がある (筆者訳)。

加藤 (2003) も脱焦点化理論を用いて、ゼロ助詞について検討している。脱焦点化することとはその「定」の意味合いが弱まるということになる。定の意味合いが弱まっ

<sup>8)</sup> 詳しくは筒井 1984、藤原 1992 などを参照されたい。

<sup>9)</sup> あるいは脱落ともいう。

て、格表示が無形式 (0) になるということはやはり 3 で見たアルタイ諸語における「不定の目的語が形態論的に無標で、定の目的語が形態論的に有標である」と相通じているとみてよかろう。

- (5) ケーキ食べようか。 (6) ?小野さんにもらったケーキ食べようか。  
 (7) 小野さんにもらったケーキを食べようか。

ポーズを置いて言うならば別として、普通は (7) の「を」を省略することがあまりないこともその定の意味合いが増したから「を」を省略しにくくなったと思われる。

これまでの内容をまとめると、日本語には目的語の定性に関係なく常に「を」で目的語の格を表記しなければならない点で 3 で見たアルタイ諸語と異なっている。しかしながら日本語とそれらの言語の間にはやはり、類似性を見出すことができることについて分析を行ってきた。5 ではさらに広い視野において、日本語の定性を表す手段の言語類型論的位置づけを考えたい。

### 5. 定性を表す手段の類型論における位置づけ

レーマン (1973、1978a) は動詞と目的語の順序はどんな言語においても、構成要素の順序全般を決める基礎なのではないかという結論に達した (大堀壽男など訳 2006)。

レーマンは「動詞と目的語の関係は言語の基軸となる構成原理を代表している」との見方から図Ⅱのように 11 の構成要素順序の相関を立てている。

図Ⅱ レーマンによる構成要素順序の相関

VO	OV
前置詞+名詞	名詞+後置詞
名詞+属格	属格+名詞
名詞+形容詞	形容詞+名詞
名詞+関係節	関係節+名詞
文頭の疑問詞	文頭以外の疑問詞
接頭辞	接尾辞
助動詞+主動詞	主動詞+助動詞
比較の形容詞+基準	基準+比較の形容詞
動詞+副詞	副詞+動詞
否定語+動詞	動詞+否定語
従位接続詞+主節	主節+従位接続詞

レーマンが主張する相関のいくつか<sup>10)</sup>に対して疑問の声が挙げられ、さらなる検討が必要というものの、なかの前置詞・後置詞はかなり高い支持を得ている。それは、V0の語順を取る言語は常に「前置詞+名詞」の形式を、OVの言語は「名詞+後置詞」の形式を持つという言語事実である。

これに基づき、SVOを基本語順とする英語やロマンス諸語の冠詞も前置詞に含まれるものと見なすことができよう。日本語の対格表示である「を」はもちろんのことで、3で扱ったSOVを基本語順とするアルタイ諸語の定の目的語の場合に強いられる表示や語尾変化も後置詞に入るものと見なすことができる。つまり、諸言語の定性の表示手段にも言語類型論という含意的普遍性—V0の語順を取る言語は常に「前置詞+名詞」の形式を、OVの言語は「名詞+後置詞」の形式を持つ—を見出すことができる。そうすると、日本語の「を」も、SOVを基本語順とするアルタイ諸語の定の目的語の場合に強いられる表示や語尾変化も、「格」以上の意味を持つことになる。この事実を把握したうえで、通言語的に見て、対格助詞を持つ言語はごくまれであるという見地を考えるとそれはそうであろうとも思えてくる。

## 6. まとめ

本文では今まであまり問題にされてこなかった日本語の名詞、主に目的語の定性について類型論的アプローチから考察を行ってきた。まず、1と2で先行研究の問題点を学習者の立場から指摘し、本文の言語類型論の観点から日本語の目的語の定性を表す手段を検討し、さらなる言語事実への解明を試みるという研究の目的を明記した。それからの3では日本語と親族関係にあると思われるアルタイ語系に属するモンゴル語およびそのほかの言語の目的語の定性について述べ、これらの言語の目的語の定性を表す文法手段について考察を行った。また、それを手掛かりに4では日本語の目的語の定性を表す手段を紐解くことに努めた。最後の5でさらに広い視野において、日本語の定性を表す手段の言語類型論的位置づけを検討した。筆者がこれまでに行ってきた考察の主なる観点や発見を次の三点にまとめる。

- 一、SOVを基本語順とするアルタイ諸語にはもっぱら名詞全般の定性を表す統語論的、かつ形態論的に体系化された文法カテゴリーが存在しないというものの、目的語名詞の定性を表す一定の手段が存在する。しかも、その手段はこれらの言語において普遍性を見せている。それはつまり、不定の目的語が形態論的に無標で、定の目的語が形態論的に有標になるという言語事実である。
- 二、日本語には目的語を表す格表記が顕在するため、表層構造で定性を表す限定詞の表示が欠けていると思われる。とはいうものの、指示語が前に来る現象や話し言葉

<sup>10)</sup> 特に名詞と形容詞の相関関係について異議を唱えるものが多い。

(おそらく、話し言葉に限らず、書き言葉にも浸透しつつある)で、常に対格助詞「を」が省略される現象にはアルタイ諸語にみられる特徴を垣間見ることができ、両者の間には相通じるところがある。

三、定性を表す手段も VO の語順を取る言語は前置詞、OV の語順を取る言語は後置詞を持つという普遍性との間に一致性が見られる。

## 7. 問題点と今後の展望

これまでの観点に不備や未熟な観点があり、より厳密な調査と、深い掘り下げ作業が必要だということは百も承知である。そういった点についてご指摘とご指導のほう願いたい。今後の研究の中で、日本語の名詞の定性の概念を切り口に日本語のさらなる諸問題への理解を深めること、定性と目的語の格表示との関係性を明らかにすること、「を」が省略される現象を話し言葉と書き言葉に分けて分析すること、及び定性と有生性との関係性も含めて今後の研究の中で充実させていきたいところは多々ある。さらに定性と受け身や使役などとの関わりなど、論じることができなかった点やより興味深い言語現象と言語事実を解明することもすべて今後の研究に期するものとしたい。

### 参考文献

#### 日本語文献

- 大堀壽夫、古賀裕章、山泉実訳 (2006) 『類型論入門言語の普遍性と多様性』、岩波書店  
小池生夫訳 (1974) 『言語の対照研究』、大修館書店  
新屋映子 (2014) 『日本語の名詞指向性の研究』、ひつじ書房  
筒井通雄 (1984) 「ハの省略」『月刊言語』13-5、大修館書店：112-121  
野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』、くろしお出版  
\_\_\_\_\_ (2000) 「語順を決める要素」『月刊言語』29-9、大修館書店：22-27  
福田嘉一郎 (2016) 「主題に現れうる名詞の指示特性と名詞述語文の解釈」『名詞類の文法』、くろしお出版：167-184  
藤原雅憲 (1992) 「助詞省略の語用論的分析」『日本語論究3 現代日本語の研究』、和泉書院：129-148  
堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』、ひつじ書房  
益岡隆志、野田尚史、沼田善子 (1995) 『日本語の主題と取り立て』、くろしお出版  
丸山直子 (1996) 「助詞の脱落現象」『月刊言語』25-1、大修館書店：74-80  
三上章 (1963) 『日本語の理論：ハとガ』、くろしお出版

#### 中国語文献

- 阿依克孜·卡德尔 (Aykiz Kadir) (2015) 〈维吾尔语名词的有定与无定〉《语言科学》第14卷 第

